
シンポジウム 1

ゲノム医療の坂と雲 ～個別化医療へむけた挑戦～

座 長 神 波 大 己 (熊本大学大学院生命科学研究部 泌尿器科学講座)

藤 本 直 浩 (産業医科大学医学部 泌尿器科学講座)

司会のことば

2019年にがんゲノムプロファイル検査が我々の臨床現場に実装され、2024年現在「がんゲノム医療中核拠点病院」(全国13カ所)、「がんゲノム医療拠点病院」(全国32カ所)、「がんゲノム医療連携病院」(全国207カ所)で実際にはがんゲノム医療が実践されています。がんゲノム医療は原発巣の属性だけでなく個々の「がん組織」内で起こっている病的遺伝子変化に応じた個別化治療を目指すものですが、病的遺伝子変化が同定されても出口となる薬剤へのアクセスはまだ限られているなど課題も存在しています。

本シンポジウムでは4名のシンポジストにがんゲノム医療の現状(坂のどのくらいを登っているのか)と課題(雲に到達するまでの解決すべき道程)についてそれぞれの立場からご解説いただきました。塩田真己先生(九州大学泌尿器科学分野)には泌尿器癌全般におけるゲノム医療による個別化医療の現状と将来展望をご解説いただきました。都築豊徳先生(愛知医科大学病理診断学講座)からはがんゲノム医療における遺伝子検査の鍵となる良質な検体採取の重要性とそれに対する泌尿器癌領域の認識不足と取り組みの遅れについて叱咤激励をいただきました。藤澤孝夫先生(国立がん研究センター東病院

医薬品開発推進部門)は現時点でのがんゲノム医療の問題として「不十分な、症例集積・組織検体採取・分子解析・治療到達性」の4つを挙げられました。その上で日本における最も先進的ながんゲノム医療の取り組みプラットフォームであるSCRUM-JapanおよびMON-STARSCREENを通じた問題解決の現状と将来展望をお示しいただきました。倉橋竜磨先生(熊本大学泌尿器科学講座)には熊本大学病院および同泌尿器癌科におけるがんゲノム医療の取り組みの実際について遺伝カウンセリングの実例を含めてお話しいただきました。

本シンポジウムを通して日本の最先端のがんゲノム医療の現在地と解決すべき課題を知ることができました。また、泌尿器癌領域は症例集積や検体採取といったがんゲノム医療の入口の部分に課題を抱えており坂の上では他癌領域の後塵を拝してきた感がありますがMON-STARSCREENに参画し将来(雲)への展望も見えてきた大変有意義なシンポジウムであったと自負しております。本稿では4名の先生方のご講演内容の要約が掲載されています。実際のシンポジウムでの熱気を思い出しながらか、あるいは想像を巡らせながらか熟読していただければ幸いです。明日からのがんゲノム診療の実践に必ず有益な情報を与えてくれるものと確信しております。